

仙台文学館ニュース

Sendai Literature Museum News

第三号

ことばとその周辺

第三回

仙台周辺で広く文字にかかわる活動に取り組んでいるグループを紹介するコーナーです。

朗読グループ「みやびの会」日本語のひびきの美しさを 見つめ直して

「万葉記」を朗読したときのこと。八百年も前の文章だというのに、そのころ京を襲った大火や地震、飢饉がどれほど凄惨なものだったかが、目の前にありありと浮かんで来たんです。

朗読グループ「みやびの会」の参加者は、しばしばそんな体験をする。字面で読むと難解な古典も、声に出して繰り返し読むことによって、不思議と意味が通ってくるのだという。



月に一度、言葉というものの深さを感じ入るひととき。

くようです」

九三年一月に九人のメンバーで発足した「みやびの会」は、今では十七人。十年後の現在でも引き続き指導に当たってくださっている玉懸洋子先生の朗読を聞き、その魅力に目覚めた佐々木部さんらが、「ことばを声として出す」という行為を通じて、月に一度、いつもとはちよつと違う「みやびな時間」を過ごそう」と、この会をつくった。



「誰の声にでも味があります」と玉懸洋子先生

源氏物語を読むと平安朝の女性たちの心が見えてきた。韓国語や中国語の作品を発表会のプログラムに取り入れたら、日本語の特徴を見つめ直すことができた。樋口一葉、夏目漱石、茨木のり子、古典から近現代作品、随想、小説、詩と、「言葉のもつ深い部分を感じ取る」楽しみは広がる。

「声に良い悪いはないんですよ。どんな人の声にも味があります。肉声には、年齢、仕事、生活体験など、その人の人生のすべてが込められています」と玉懸先生が語った。メンバーはしみじみと頷いた。

●参加申し込み/問い合わせ先
電話(022)275-7678
(佐々木部さん)

学芸室日記

●中原中也展では、館全体を中也一色に染めよう！と、いたるところに詩のパネルを展示しました。終了後、パネルプレゼントを試みたところ、八十枚程のパネルに対して三百人もの方々が申し込まれたのには、職員一同驚きました。「月夜の浜辺」「汚れつちまつた悲しみに」などが人気でしたが、それほど知られていない「春の消息」が、一つのメルヘンより人気を集めたのは興味深いことでした。



来場者の皆さんの注目を集めた中原中也の詩のパネル

●駅前の「書店とタイアップ」し、展示中に中原中也関連書籍のブックフェアを組んでもらいました。その後、「書店が情報提供している」「せんだいタウン情報」の「文庫ベスト10」を見たAyac、Vol.136.にて新潮文庫「中原中也詩集」が九位と六位にランクインしているではないですか！思いがけなくも嬉しい出来事でした。

●「3.7」に取材でお邪魔した時、何か見覚えのある二階の欄間：と思ったら、開館記念特別展「夏目漱石展」で再現した、漱石邸の緑間の欄間でした。展示終了後、廃材利用をしたいという方々にお分けしたところ、巡り巡ってここに落ち着いていました。訪ねられた方は、ぜひ一見を。



「夏目漱石展」で使った欄間が意外な場所で……

●第三回詩のボクシング宮城大会が三月二日(日)に開催されました。予選を勝ち抜いた十六名のなかで見事優勝の栄冠を射とめたのは、仙台市青葉区の会社員、日野修さん



第3回 詩のボクシング 宮城大会
優勝した日野修さん(左)と準優勝のボンジョルノ・クマンさん

●今年までの月末休館日が変更になります。四月からは、毎月第四木曜日が休館日となります(月曜日と休日の翌日の休館は今まで通り)。不安な方は、事前にお電話で開館日をご確認下さい。どうぞよろしくお願い致します。

(53)。昨年に引き続き二回目の出場で、全国大会出場を果たしました。今年の全国大会は七月十二日(土)に東京霞ヶ関のイイノホールで行われます。

春の特別展

生誕100年記念 林芙美子展
花のいのちは
みじかくて……

館長井上ひさし講演会、読書会、朗読と音楽の調べ、映画上映会など関連企画も充実。どうぞ期待！



4月5日(土)~5月25日(日)

「私は宿命的に救済者である」生と性を見つめつけた、昭和を代表する女性作家の全体像。



『春の雪 豊饒の海・第一巻』

三島 由紀夫 著

三島由紀夫

春の雪

豊饒の海・第一巻
三島由紀夫著
新潮社刊

いつだったか、新聞社の学芸部記者と雑談中、「小池さんは百年後、ミシマとカワバタ、どちらが読み継がれ、残されていると思いますか」と聞かれたことがある。

むろん、ここで言うミシマとは、三島由紀夫であり、カワバタとは川端康成のことであるが、私の答えは「ミシマ」だった。

百年後も、活字が生まれ、製本されて、現在のように本という形で市場に出回っているかどうかはわからない。すべての書籍がCD-ROM化され、パソコンを使わなければ活字が読めなくなっているかもしれないのだが、それでもミシマがカワバタか、と問われたら、ミシマが残されているだろう、と私は今も思っている。

三島由紀夫も川端康成も、生まれながらにして神経衰弱的な脆さを孕んでいた作家である。川端はその脆さを脆いままに作品化し、死んでいったが、三島は違う。脆さと戦う、とい

う姿勢を見せ、その痛々しいまでもの姿勢こそが作品上の骨格、絢爛豪華な文体、独自の際立った観念を生み落とした。三島はあくまでも大胆不敵に小説に立ち向かい、おのれの美学を全うしたのだ。

作品が優れている、或いは、多くの読者を獲得した、という理由だけで、一人の作家の残したものが五十年後、百年後も、読み継がれていくとは限らない。作家本人が発したエネルギーの大きさ、それ自体が、時代を超えて読み手の胸の内に響いていくものではないか。

壮絶な自決騒ぎのせいだけでは決してなく、三島由紀夫はやはり、没後三十年以上たった現在も、確実に読み継がれてきている。これからも、ずっと先も、同じようにその時代時代を生きた読者の胸の内を、切っ先鋭い、美しいナイフで抉り続けていくだろうと私は考えている。

『春の雪』は、その三島由紀夫が晩年企てた、途方もなく壮大

な試みでもある。「豊饒の海」四部作の中の、第一巻目にあたる。とりわけこの作品は、他の三作品に比べ、まことに小説らしい小説として私を魅了し続けてきた。一言で言うならば、これは大河小説ふうに綴られた

一大恋愛総巻であり、狂おしいまでにロマンティックな禁断の恋物語である。私は東京で生まれ、東京で育った人間だが、会社員だった父親の転勤に伴い、高校一年の秋に仙台に移り住んだ。一九六〇

年代の後半から七〇年初頭にかけて。思春期と呼べるすべての時期を私は仙台で暮らし、この地において、あの、疾風怒濤のような時代を体験した。

真綿が水を吸いこんでいくように、本を読めば身体が潤い、精神が磨かれていった時期だった。男友達との待ち合わせのほとんどは仙台市内の書店だった。小遣いの多くを書籍代に費やすのが楽しくてならなかった。小遣いでまかないきれなくなると、友達や先輩から読みたい本を借りて読んだ。

学校をさぼり、好きな本と原稿用紙を携えて、当時流行っていたパロック喫茶の店に通いつめた。日がな一日、原稿用紙に詩や駄文を連ね、それだけでは飽き足らずに仲間と同人誌を作り、街頭で売っていたのもあの頃だ。

一九七〇年十一月二十五日。三島由紀夫が東京市が谷の自衛隊駐屯地で割腹自殺した、というニュースが流れた時、私は



自宅にいた。仙台の十一月は寒い。茶の間には炬燵が出ていて、炬燵の上には籠に盛られた密柑があった。

いつものように学校をサボ



って午後になるまで自宅でぐずぐずし、そろそろ出かけてくだんの喫茶店にも行くこう、と算段していた時だった。籠に盛られた密柑に、窓から射し込む淡い冬の光がだんだん模様を描いていた様子を今もはっきり思い出すことができる。

三島の死を知った。それは、私自身の、非常に私的な思春期の中での出来事だった。終生、儀式としての死にこだわりの作家である。「春の雪」の中の夢まぼろしのように切ないロマンスもまた、儀式化された死と隣り合わせになっ

肉体は滅びても魂は永遠である……という、輪廻転生をテーマに描いた四部作のうち、「春の雪」に表現された甘く情熱的な、或る意味では子供じみたロマンティズムは、私が好きな三島由紀夫の側面そのものでもある。そしてそれは、仙台の地で暮らしていた頃の自分自身の記憶と重なり、今も私を恥ずかしいほど幼稚な感傷に耽らせてやまない。



小池真理子(作家) 1952年、東京生まれ。成蹊大学文学部卒。96年「恋」で直木賞受賞。98年「欲望」で島清恋愛文学賞受賞。仙台を舞台にした「無伴奏」「水の罌」など著書多数。最新作は「虚無のオペラ」(文藝春秋刊)。

仙台文学館の展示品から



魯迅にあてた「惜別」という裏書きが残されている。

福沢 藤野
謹呈 周君

藤野厳九郎写真

藤野厳九郎写真

庄司 潤子 (仙台文学館学芸員)

「藤野厳九郎写真」は魯迅の小品「藤野先生」で知られる仙台医学専門学校の藤野厳九郎教授の肖像写真である。北京魯迅博物館所蔵の原資料を、当館の開館にあたり関係各位のご協力により複製したものである。

魯迅(本名周樹人)は、一九〇四(明治三十七)年九月、仙台医学専門学校に留学した。魯迅が医者を目指したのは、父親の病死を機に人命を救いたいという思いと、日本の近代が西洋医学に端を発しているという知識を得て、それに倣い祖国

の近代化に寄与したいという思いからだ。こうして、仙台医専で解剖学を講じる藤野厳九郎教授と出会い、ノートへの添削指導を受けたことは、つとに有名である。

そのような交流の一方、日清戦争の敗戦国から留学してきた魯迅に、偏見と差別が襲いかかる。「藤野先生」には、添削指導を試験問題漏洩であると噂され、屈辱的な体験をしたこと、また日露戦争の幻灯を見たことをきっかけに文学へ転身する決意をしたことが記

されている。祖国の危機を自分の問題としてとらえた魯迅は、人間としてのアイデンティティを追求する文学によって、中国の変革を成し遂げようとしたのであった。その人生の転換期に藤野教授が居合わせ、生涯にわたり強い影響を及ぼしたのである。

一九〇六(明治三十九)年、医学を捨てて東京で文筆活動に入る魯迅の手元には、藤野教授から贈られたこの写真があった。作家としての地位を確立した後、藤野教授を「もつとも私を感激



魯迅 1881(明治14)年~1936(昭和11)年

「昭和初期の詩と青春

—— 中原中也とその周辺 ——

三浦 雅士

仙台と中也を結ぶもの

以前、「青春の終焉」(講談社)という本を書きまして、そこで中也と小林秀雄にずいぶん触れたんです。そんな縁もあって、今日、ここでお話をさせていただきます。ことになりました。

さて、仙台という街は、実は日本の文学においてたいへん重要な意味を持っています。つまり、優秀な文学者を振ってしまふ女性に恵まれているところなんです(笑)。

富永太郎という人が仙台の旧制二高に來た。それで人妻になんとか撞れをもつて、でも振られて、振られて悶々として、とうとう上海まで行っちゃった。その帰りに京都に寄ったところ、中原中也につかまつた。富永は「俺一人でこの病氣(中原中也)をあつかうのはた

青春の終焉

……

「青春の終焉」講談社刊(2002年芸術選奨文部科学大臣賞)

中也は「東北人」だった

そんなわけで、「中原中也は実は東北の人だった」という法螺話を大真面目に考えてしまふのです。

実際、中也はとてつもない身体的な感受性で啄木と賢治を理解していた。だから僕は強引に、「中原中也は身体で東北を理解していたんだ」と言いたいのです。

詩ってというのは書かれたものじゃない、体で記憶するもの、体でわからなきゃいけないもの、だという考えが、中也にもあった。中也に初めて会った人間は大抵、「サーカス」や「朝の歌」の作品の朗誦を聞かされたものだそうです。中也はこれらを丸暗記してたんですよ。

日本の近代文学の枠をグーッと広げて、もつとはるかに深い、縄文時代くらいからずっと培ってきた身体、その鼓動、リズム、ビートにつながっていくっていうこと。それを中原中也はやっちゃった。それが最大の謎だったでしょう、小林や大岡をはじめフランス近代を手本にして日本の近代について考えた人たちにとっては、

「東北」は日本だけのものではなく、東欧やドイツは「東北」。フランスロマン主義の成立に決定的な影響を与えたのは、ゲ

中也の偉大さ、「謎」

文芸批評の世界では「神様」だった小林秀雄にとつてさえ、中也は巨大な謎だったようですよ。代表作「モオツアルト」はじめ作品のあちこちに中也の影はよぎっています。

中也の研究家で評伝も書いた大岡昇平さんは、小林秀雄の「中原中也の思ひ出」の一節、「中原の心の中には、実に深い悲しみがあつて、それは彼自身の手にも余るものであつたと私は思つてゐる。彼の驚くべき詩人たる天資も、これを手なづけるに足りなかつた。」が、ほとんど同じ修辭で「モオツアルト」の中でも繰り返されてい

ると指摘しています。そしてそれを大岡さんは、モーツアルトについて書いたとき小林には中也の記憶がよみがえつたのだと解釈しています。でも、僕は逆だと思っています。中原中也っていう非常に不思議な男と三角関係になつた。その、三十歳で死んでしまつた、間のような、謎のような男の謎を解くために書いたのが、「モオツアルト」だつたと思うのです。中也追悼ですね。

トについて書いたとき小林には中也の記憶がよみがえつたのだと解釈しています。でも、僕は逆だと思っています。中原中也っていう非常に不思議な男と三角関係になつた。その、三十歳で死んでしまつた、間のような、謎のような男の謎を解くために書いたのが、「モオツアルト」だつたと思うのです。中也追悼ですね。

啄木、賢治を身体で理解していた中也

中原中也には散文がうまく書けなかつた、でも彼の話というのはすこつた、と昇平さんは書いています。「彼はいつも長々と話した。そして友人たちは中原の強固な推理的能力を、その魂の美しさを、優しさと共に、少なくとも二人きりで対座している間は、疑うことができなかった」と。

僕はかつて「批評という鬱」(宮波書店)という本の「短歌と近代」という評論の中で、「声に出して読むこと、声の重要性、それが東北だ」と書きました。明治になって近代化が進むと、文学の中心が音読から黙読に移つた。短歌も例外ではなかつた。

柳田國男という民俗学者がいました。彼はもともと香川景樹の系列の歌人ですが、子規が「歌よみに与ふる書」で唱えた近代的な文学観に反発して、歌をやめちゃうんです。古今の歌を千でも、千でも

「若い子の文学から『小説・捨てていく話』まで」

去る平成十四年十一月二十四日、「現代少年少女詩・童謡詩展」の関連イベントとして、作家の松谷みよ子氏の講演が開催されました。

「龍の子太郎」「ちいさいモモちゃん」など数々の児童文学の名作を手掛けた松谷氏は、これまで多くの作品を書き続け

だろつと僕は思います。中国文学にとつては満州が「東北」。そして東北は「鬼門」。なぜ、そんな風に言われなければいけないのか。頭脳に対する身体という問題を考えるきっかけを、「東北」は与えてくれるんだと僕は思っています。啄木や賢治、中也のように日本の近代文学の枠を大きく越えて、はるかに深い水脈に続く動き。日本の近代文学に対抗して、それは違うんだ、それだけじゃだめなんだよ、というムー

ブメント。もしも今、そんなムーブメントが出てくるとすれば、東北から、東北の中心である仙台、とりわけここ仙台文学館から出てくるしかないじゃないですか。そのことを、中原中也は示唆してくれているのだと思います。



三浦雅士(評論家)1946年、青森縣生まれ。70年代に雑誌「ユリイカ」「現代思想」で編集長を務め、80年代以降、文学、芸術を中心に執筆活動を展開。現在、「ダンスマガジン」「大航海」編集長。著者「メラノコリーの水脈」(第6回サントリ一学芸賞)、「小説という植民地」(第29回藤村記念賞)、「身体の零度」(第47回読売文学賞)、「私という現象」(寺山修司)など多数。

講演 現代少年少女詩・童謡詩展 関連イベント

「若い子の文学から『小説・捨てていく話』まで」

松谷 みよ子



松谷みよ子(作家、児童文学者)1926年、東京生まれ。51年「貝になつた子供」で児童文学者協会賞。国際アンデルセン賞優良賞の「龍の子太郎」。「現代民話者」では民話の世界に新たな視野をひらいた。

ることができた理由として、坪田譲治氏という懐の深い師にめぐりあつたこと、前夫とともに切り盛りした劇団の活動を通じて民話の世界に出会つたこと、そして子どもと出会つたことの三つを挙げられました。

とりわけ「モモちゃん」シリーズは、たくましく育つわが子の身体と魂の成長に突き動か

されて書いた、まさに子どもと出会つたからこそ書けた作品だと語り、次のような逸話を紹介してくださいました。テレビニュースが映した戦

争に対する憤りを全身で表すわが娘の姿などに「ちいさい子は大人と同じように深い悲しみも喜びも感じるのだ」と、はつと気付いたこと。「いじめの果てに死んでしまつた妹のことを聞いてほしい」という読者からの便りに応えて「わたしのいもうと」という詩を書いたこと……

胸を打つ数々のエピソードの最後にこの「わたしのいもうと」が朗読され、「自分よりも弱い者をいじめ。自分と同じでない者を許さない。そう



「小説・捨てていく話」筑摩書房刊

詩人・富永太郎の出發(二)

草稿「夜の讃歌」をめぐる

赤間 亜生 (仙台文学館学芸員)

富永太郎は、旧制三高に入学した一九一九(大正八)年九月から、退学する一九二二(大正十一年)十二月までの二年あまりを仙台で過ごした。今回は、富永の仙台時代の資料のうち、特に「夜の讃歌」の草稿を中心に取り上げる。

(※原資料はすべて神奈川県近代文学館所蔵、当館は複製所蔵)

「夜の讃歌」は末尾に「二、九、四完成」とあり、富永が仙台にいた一九二二(大正十一年)に作成されたことがわかつている。当館が所蔵している仙台時代の複製資料としては、このほかに「深夜の道士」がある。

「夜の讃歌」は「コスモスといふ白日」の世界と「晦冥の夜」の二元論的枠組みの上に成立



富永太郎 1901(明治34)年~1925(大正14)年

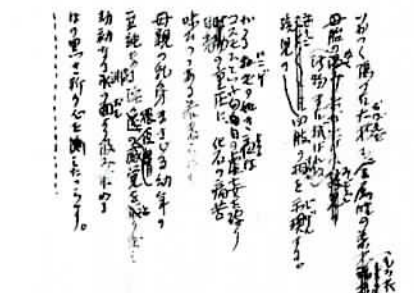
している。「日光」に象徴される(明知・秩序・合理)などの世界を寓意しているこの「白日」の世界は、「虚妄」であり「苦痛」の生を強いられる。それを具体的に表しているのが、「化石」の非生命的で、硬直したイメージであり、実体を失ったあり方を示す「仮構の万象」という表現である。詩人は、そうした「白日」の世界の一切を、解消・溶解させていく、「和毛」(うぶ毛)のように柔かい混沌とした(夜の闇)の存在を称揚している。

当館が複製制作した「夜の讃歌」草稿には、かなりの訂正・削除が施されている。この異同については、すでに大岡昇平による「定本富永太郎詩集」(昭和四十六年、中央公論社)巻末の「注と異文」に詳しいが、所載している資料はその「注と異文」のなかで「草稿1」と呼ばれている(※以下「草稿1」と呼ぶ)。

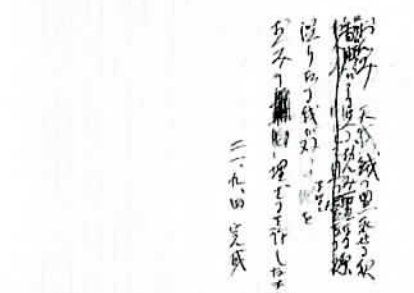
この「草稿1」は前述の「注と異文」にも指摘があるが、洋罫ノート三枚に渡って綴られている。この「草稿1」は前述の「注と異文」にも指摘があるが、洋罫ノート三枚に渡って綴られている。最終形に至るまでの富永の



「夜の讃歌」草稿1(複製)1枚目



「夜の讃歌」草稿1(複製)2枚目



「夜の讃歌」草稿1(複製)3枚目

創作行為を推測することができ、第一連三行目の「晦冥」を「晦冥」にしたことで、「闇」のイメージはさらに深められている。第三連三行目の「時劫」は、「黒暗・混沌」の世界を表象する「劫初なる淵の面」と、離齋が生じるため、「黒暗」の「夜」とは対照的な「日光」という詩句に改められたと推測される。

第三連第二行「コスモスといふ白日の…」は、草稿から見ると、後から付加された一行だと思われるが、それはこの草稿に伴うものであろう。これによって「黒暗」と「日光」の対照性が際立ち、「夜」と「白日」の世界と

の二元的対立の構図が明瞭化する。また、第一連三行目の「闇性」は、初め「粘性」と表現されていた。それを「閉じる、閉ざす、塞ぐ、とどめる」といった意味を持つ「闇性」と変更したことにより、「化石」の硬質でこわばったイメージと連動して、「仮構の万象」はより硬直し流動性を喪失した、非生命的な様態として想起される。これらの草稿から、富永が(光(硬直・非生命・静的)〜闇(柔軟・生命・動的)という対比・二元論的な構図を鮮明にするために、初期形を書き変えていったことがわかる。

「母なるもの」のイメージ

この詩において、たええられている「夜の闇の混沌」は、すべての事象の根源的・源初的なものとして表象されているが、それは「母なるもの」のイメージと通底している。そして注目すべきは、この「母なるもの」のイメージ、いわゆる万物の起源が、決して美しいものではなく、むしろグロテスクなものとして表現されていることである。これは第一連第四行の「母胎の温み未だ失はぬ孩児のぶよ」とした四肢の相」から「母胎の汚物まだ拭はれぬ孩児の四肢の相」への改稿にも、はつきりと読みとることが出来る。

北村太郎が指摘しているように、この詩句はこれより後に書かれる「無題(たゞひとり黎明の森を行く)」や「遺産分配書」中に見られる、出生・存在の起源への、富永の複雑なこだわりに通じる表現であり、初期の草稿でこの重要なモチーフの推移をたどることが出来るのは非常に興味深い。これは、第三連第六行「淫猥の皮膚感覚」(初期形は「淫逸の感覚」)に見られる(性)のモチーフとも、今後関連させて考察する余地があると思われる。

仙台での萌芽

「深夜の道士」や「夜の讃歌」に、日夏耿之介の詩集「黒衣聖母」の影響があることはすでに指摘されている。しかし、「夜の讃歌」に見られる、これまでに述べてきた改稿からは、日夏の絢爛な詩表現から逸脱する富永独自の詩句・モチーフが垣間見られることも事実である。日夏の詩に傾斜し、接近すること

によって、逆に差異が露呈し、それが後の富永固有の詩の展開を予見させているとも言えるのであり、この時点での詩人の才能の可能性をうかがわせるのである。

富永が、仙台時代に描いた自画像がある。当館でも複製として所載しているこの画は「夜の讃歌」を作成した頃と同じ一九二二(大正十一年)の作とされる。この画について、大岡昇平は

「緊張した少年の表情」を読み、「暗い影はなく、愛するものを見付けた青年の喜びを反映している」と評している。確かに、振り向くその表情からは、純粹で潔癖で、そして控えめな青年の面持ちが感じられる。死の前年である一九二四(大正十三年)制作(推定)の自画像が長髪で、大きく見開いた目でこちらを見据えているのは対照的である。仙台時代の自画像には、



油彩「自画像」(複製)1921(大正10)年

死の影にとらえられる前の、理想と希望と野心に満ちた青年詩人・富永太郎の若く初々しい姿が、永遠にとどめられている。

文学のある風景

NPOカフェC7

メディアテークを背にして裏手の通りを115歩。南抜けのような空き地が目立つ界隈に、そうと知らなければ通り過ぎそうな古びた木造の二階建てが建ち残っている。空き家だろうかと近付くと、店先には元気な手書き文字が踊っている。



寺山修司の詩などを歌った大沼寛典さんと石森孝行さん

「C7」は、昨年の秋に誕生したばかりのカフェだ。イベントのチラシなどが雑然と置かれている1階は、カウンターとテーブルを合わせて5、6人も座れば満員になる。この日は壁面を利用し「懐かしの市電写真展」が開かれていた。



自作を1時間半にわたって読み続けた、つじりょうさん

靴を脱ぎ狭い階段を這い上ると、懐かしいような、奇しいような薄暗闇が待っている。襖は取り払われて一間続きになっているものの、それでも二十畳に届かない。そしてそのまた奥には……

この夜は、C7では初めてとなる朗読会。2組の出演者が自作を、あるいは既存の作品を読み、歌った。来場者も飛び入りで朗読した。「俳句の会」とともに月に1度のペースで続けたいという。

カフェだから、お茶も軽い食事も提供する。夜はビールだって飲める。でも、ただそれだけの店ではない。

「おしゃれにアートとNPOを語る場があってもよい」が開店の動機。月に2つづつを目標に新しいシリーズを立ち上げたい」と住掛け人の粟野邦夫さんが微笑んだ。

「いろいろなアートや情報が集まる場所にしたい」と店長の愛原純子さん。「上井晩翠・土井八枝展」、写真展、イラスト展、コンサート、「映画のことを話す会」など、わずか半年で20を超え

詩人の尾形亀之助が住んでいたのもこの辺りらしい。文学やアートの世界へと続く秘密の通路があればいいなと思った。(T)



一番奥の部屋。昭和30年代のマンガ雑誌。LPレコード1,000枚。何時間でも炬燵にもぐってほしい。

カフェC7
〒980-0821 仙台市青葉区春日町5-13
電話 022-225-7676
E-mail fami@d1.dion.ne.jp
OPEN 12:00~20:00 金土は~22:00
月曜定休
*3/25~4/27まで、図書館で借りた本を提示すれば50円引きキャンペーン
*「朗読の会」は第2金曜日